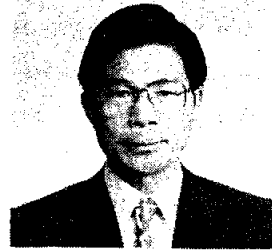


『自然は常に正しい』

八木 静夫



麦秋の夕映をすっしりと背にし、万葉の古歌にうたわれた眉山、悠揚たる吉野川をあかず眺める。

瀬戸大橋が開通し、やがて明石大橋も完成する。科学、技術の進歩に驚くばかりである。四国にも観光開発、そしてリゾート開発がさらに一段と進むのであろう。

徳島の眉山は市民の散策や憩いの場として親しまれてきた。昔から茂助ヶ原と呼ばれた山頂部の一面のササ原は観光用の展望台、売店などが建ち並び、また園地や広大な駐車場が造成され眉の面影は著しく損なわれてしまった。吉野川の砂浜にはシオマネキやトビハゼが生き生きと活動し、ヨシ原にはセツカやオオヨシキリが鳴き交い生氣に満ちていたという。いま、ここにもゴル

フ場がある。

いたる所で自然がその美しさを失い、動植物がかなりの速度で数をへらしている。地球規模で進む環境破壊を憂える声が高まる昨年、第四十回植樹祭が徳島で開かれた。会場となった神山森林公園の広大な園内には二百種を越す樹木が植えられ、森林浴、ピクニック、ファミリー広場など三十の施設がある。開園後の人気は高く、予想をはるかに上回る盛況ぶりである。自然の緑をぶして人工的に造られた緑に自然を求めて人が集ってくる。われわれがいかに自然に触れるすべを失ってしまったかを感じ知らされる。そこで人間の生活のあり方や価値観を問い直してみたのである。

人間環境において自然の系が保全されていることは、人間形成の上で欠かれない。自然の荒廃は精神の荒廃に深くかかわっている。ゲーテ（一七四九—一八三二）の「自然は常に正しい」という言葉を思い浮べるからである。

地球上に生命が誕生して四十億年。生物は外的環境に適応しつつ、自然と一体化しながら進化してきた。ダーウィンのいう適合性とは生物と環境の相互関係が複合したものである。人類は猿人から進化しておよそ二百万年になる。環境に働きかけ続け、そのことを通して人間化した人類は「人間・環境系の諸矛盾」を作り出してきた。

ところで、生物が遺伝情報として受けついで潜在的可能性は、実際にはそのすべてが形質として発現するわけではない。誕生後の初期に経験した刺激が、遺伝子の発現のために不可逆的効果があることが知られている。アメリカのヒューベルとワイセルによって、ネコなどの図形認識で網膜上の図形に対応する神経細胞の配線連絡が、図形の刺激の有無にかかわらずあらかじめ遺伝的に決定されていることがわかった。ネコの図形認識では、その配線は生後数週間の間に刺激を受けなければ実際には形成されないのである。

さて、人間の行動は世界に開かれている。個性は世界の多様性の中でそれぞれの遺伝的決定と体験・学習が作用し合って形作られる。「その気になること」「そうしたい」「そうせずにはいられない」は自然と人間のかかわり合いを通してはぐくまれていく。

人間の成長段階に応じ中心活動は変化する。人間や自然との積極的、主体的ななかかわりによって形成された鋭敏な感性は人間の感情を育てる。われわれが行動しようとし、達成されたときの喜びの心、失敗したときにいだく悲しみの心。ねたみ、そねみ、うらみの心。これら思考・創造・意図の精神の「よく生きていく」創造的行為の座は大脳の新皮質の前頭前野で営まれていることが知られている。「うまく生き

ていく」適応行為の座は後方領域にあり、三才頃までに発達するが、前頭前野は五才ころから十才ころにかけて発達するのである。自然との共存をせざるに求める働きが育つ人間形成のあり方と社会のあり方を明らかにしなければならぬ。

人間のもつ生れつきの能力が十分に発現されるためには、環境はその豊さと多様性をもたなければならぬ。主観的な人間中心主義から脱却し、自然との謙虚な協力の中に客観的人類の新しい展望が生れてくるのではないだろうか。

八木静夫（やぎ しずお）

一九三一年長野市に生る。

一九五四年東北大学を卒業。現在徳島大学教授。研究テーマは遺伝子発現、生物学の人間生活における役割を探る。